

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 8 日現在

機関番号：31203  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2014～2016  
課題番号：26380648  
研究課題名(和文) 知の専門分化と公共知識人 ニューヨーク知識社会における知的ネットワーク分析  
  
研究課題名(英文) Specialization in Scientific Fields and Public Intellectuals: Intellectual Networks in the New York Intellectual Society  
  
研究代表者  
清水 晋作 (SHIMIZU, Shinsaku)  
  
盛岡大学・文学部・准教授  
  
研究者番号：60374873  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、知の専門分化が進展する中で、特定の領域の専門家にとどまらず、非専門家である「公衆」に知的にアピールした「公共知識人」として評価されたニューヨーク知識人を研究対象とした。ここで対象とした知識人は、主にD・ベル、I・クリストル、N・グレイザー、I・ハウ、E・シルズ、R・ホフスタッターなどである。彼らの知的キャリアを跡付けることで、「公共知識人」の成立を可能とした知的背景について考察した。

研究成果の概要(英文)： This research analyzes both the social historical background of the New York Intellectuals by reviewing their intellectual careers. The New York Intellectuals, a group of American (mostly Jewish) writers and literary critics based in New York City in the mid-20th century, are regarded as “public Intellectuals” because they appealed to the public and facilitated the transfer of knowledge from various specialized fields to the public so it could be understood by non-professionals.

研究分野：社会学

キーワード：公共知識人 公共社会学 社会学史 知識社会学 冷戦

## 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後に、地震・津波、原子力の専門家から一様に「想定外」という言葉がきかれ、専門知に対する信頼が大きく揺らいでいる。特に「原子カムラ」とよばれる閉鎖的な専門家集団内部でのみ流通する専門用語を用いたコミュニケーションは、原発の「安全神話」の構築を後押しした。大震災以降、「知の公共性」への関心が高まってきている。この問題は、社会学にとっても無縁ではない。社会学の各領域の専門化・細分化が進んだことによって生じた知の分断状況を悲観し、ASA 前会長 Burawoy は、「公共社会学」の意義を問うた。「公共社会学」成立の条件、それを可能にする知識社会のあり方を探ることは、社会学にとって重要な課題である。

本研究は、ニューヨークのユダヤ系知識人を対象とするが、彼らは、「ニューヨーク知識人」とよばれ、ベル、リブセット、グレイザー、コーザー、セルズニック、ミルズ、モイニハンなどの社会学者、または、ハウなどの文学者・文芸評論家が含まれている。彼らのすべてではないが、その多くはユダヤ系であった。Jacoby(1987)により、ニューヨーク知識人たちは、「公共知識人」として戦後アメリカ知識社会におけるその役割を評価されている。近年では、彼らの意義や限界を論評する著作やリーダーズが出版されている(Jumonville 2007; Goffman and Morris eds. 2009)。日本国内では今日まで、保守的という評価を受けていることもあって、この知識人集団にあまり高い関心が払われることはなかった。ただし矢澤(1996)は、ベル、セルズニック、コーザー、グレイザーの4人を「公共社会学者」として取りあげている。

私は、このような学術的背景を意識して、ニューヨーク知識社会の中心人物とみなされるダニエル・ベルを中心にこの知識社会について研究をおこなってきた。私は、彼の理論的著作をその当時のアメリカの社会・政治的背景から読み解くことによって、彼の理論の有効性を明らかにした。またベル自身が創刊した『パブリック・インタレスト』誌での情報発信の仕方に着目し、社会学理論上の知見を「公衆」に伝達する方法に光をあてた。また彼の理論的業績の考察や『パブリック・インタレスト』誌における編集過程をみるなかで、他のニューヨーク知識人との知的交流過程にふれることとなり、その交流過程について検証してきた。「イデオロギーの終焉」や「脱工業社会」というテーマは、ベルの代名詞とみなされているが、これらのテーマは、ニューヨーク知識社会における知的交流過程から生み出されたものであった。これまでの研究を通じて、ダニエル・ベルがニューヨーク知識社会におけるネットワークの中心にいたことを明らかにした。さらにベルの理論・思想は、保守的な性格をもっていないことを明らかにした。マッカーシズム期におけるマッカーシー批判、アフターマティヴ・ア

クションに対する条件付きの承認、学生反乱における学生たちへの共感などに端的に彼のリベラルな姿勢が示されている。こうした研究成果をもとに、対象をニューヨーク知識人に広げ、「公共知識人」としての意義を明らかにしようと研究計画を立てた。

これまでの社会学史・理論研究の多くは、特定の社会学者を研究対象として取り上げ、当該社会学者の同時代的意義および現在の文脈における理論の有効性を解明してきた。本研究は、複数の知識人間の知的ネットワークを考察の対象とする点で、他の研究にはない独創性を有している。本研究は、知識社会における知的交流過程の中から社会学知が生成されるプロセスを追うことができ、専門分化が進化した後の学術的世界における知の生成のモデルを提示する。異なる専門領域の専門家同士が知的交流を繰り返しながら、新たな知を生成し、「公衆」に向けてそれを発信し、また「公衆」の形成の一助となるような「公共知識人」の役割を明らかにするという意義を本研究は有している。

### <参考文献>

Goffman, E. and D. Morris eds., 2009, *The New York Public Intellectuals and Beyond: Exploring Liberal Humanism, Jewish Identity, and the American Protest Tradition*, West Lafayette, Indiana: Purdue University Press.

Jacoby, R., 1987, *The Last Intellectuals: American Culture in the Age of Academe*, New York: Basic Books, with a New Introduction, 2000.

Jumonville, N., 2007, *The New York Intellectuals Reader*, New York: Routledge.

矢澤修次郎, 1996, 『アメリカ知識人の思想 ニューヨーク社会学者の群像』東京大学出版会.

## 2. 研究の目的

本研究は、「公共知識人」として評価されているニューヨークのユダヤ系知識人が生きた知識社会史を辿り、彼らはいかに「公共知識人」たりえたのか、また専門知と「公衆」との架橋をどのような形で可能としたのか、その知的・歴史的・社会的背景を明らかにする。その際、以下の点を中心に検討する。

### (1) 専門領域を越えた知的交流

ニューヨーク知識人たちは、社会学など、特定の領域に限定された知識人ではない。彼らは、知的キャリアの出発点から、特定の分野に限定することなく、知的活動をおこなってきた。第二次大戦後のアメリカにおいては、知的専門分化が進展し、またニューヨーク知識人たちが大学にポストを得るようになり、特定の領域の専門家として活躍するようになるが、それぞれの専門領域に軸足を置きつつも、他領域の知識を活用し、また専門の異

なる知識人・専門家との交流を絶やすことが無かった。

#### (2) 「公衆」に対する知的発信

ニューヨーク知識人たちは、情報発信のメディアとして、学術雑誌ではなく、彼らが「知的ジャーナル」とよんだ雑誌を多く利用した。彼らが見出した学術的知見は、専門家に向けてのみ発信されたのではなく、知的関心の高い「公衆」に向けて発信された。彼らの業績は、学会誌や学術誌に掲載されるよりも、「知的ジャーナル」を通じて発信されることが多かった。しかも彼らは、知識人として自ら雑誌を創刊・編集し、『パブリック・インタレスト』、『ディセント』、『パーティザン・レビュー』などに論考を掲載していた。

#### (3) 時論的な分析

ニューヨーク知識人の論考は、その時代ごとの主要な社会的争点を扱っており、きわめて時論的な特徴をもっている。さらにその分析は、専門知識に基づいた理論的なものでもある。多くの人々が関心をもつ社会的争点について、理論的な分析を展開した点で、稀有な「公共知識人」であった。

### 3. 研究の方法

(1) ニューヨーク知識人たちの業績について分析する。その際、各知識人の業績を比較検討し、相違点や共通項を析出する。知識人間の知的交流や知的ネットワークのあり方を明らかにできるように研究を進める。

(2) ニューヨーク知識人たちは、自らの知識人としての軌跡を振り返るような論述を多く残している。そこから読み取れる、知識人としての特質を明らかにする。オーラル・ヒストリーや回顧録等の資料を積極的に活用する。

(3) ニューヨーク知識人は、時代ごとの主要な社会問題について直接、関わり、批判や評価をおこなってきた点に特徴がある。それゆえその時代の社会的争点にどのように向き合い、どのような態度・立場をとってきたのかを明確にすることが重要である。それゆえ彼らの議論と経済・政治・社会的背景を関連づけて考察することが必要である。

### 4. 研究成果

(1) ニューヨーク知識人の特徴を捉えるために、彼ら自身が論じている知識人論、およびニューヨーク知識人論を考察した。特にダニエル・ベルの知識人論が、ニューヨーク知識人を総論的に扱っており、それゆえベルの知識人論の視座を手がかりにした。

ニューヨーク知識人は、政治的・社会的立場も様々であり、単一の思想でまとまった集団ではない。しかしながら知識人集団としての、ある一定の特徴をもっていた。それは以

下の4点に集約できる。

ニューヨーク知識人の多くは、ユダヤ系移民の2世として、共通の経験をもっている。その経験は、貧困にあえぎながら、親の世代との隔絶を感じつつ、「文化」への飢餓感をもち、それを活力に知的世界に進んだ、というものである。

彼らは、一様に「大恐慌」をくぐり抜けた経験をもっている。大学を卒業し、すぐに「知識人」として活躍したというよりも、大恐慌期に経済的困窮にあえぎ、ベルをはじめとして雑誌の編集者に就いた者もいたが、多くは、知的世界から離れつつ生計を立てていた。

彼らは、アメリカ社会から「疎外」されてきた経験をもっている。ユダヤ系というマイノリティとしてアメリカ社会において差別を受けることもあった。彼らを感じた「ユダヤ文化」とアメリカの文化との距離感が、独自の社会認識を形成することとなった。

彼らは、「政治的ラディカリズム」と決別してきた。若い頃、トロツキズムをはじめとするラディカリズムに傾倒した経験もっており、様々な要因からそこから離れた。ベルは、トロツキズムではなく、アメリカ社会党に参加していたように、その経験は一様とはいえないが、何らかのラディカリズムに接した経験は、後の彼らの思想と行動に大きな影響を与えている。

(2) ニューヨーク知識人の知的キャリアを跡付け、知識人集団としての紐帯を形成する過程について検討した。ニューヨーク知識社会で中心的に活躍したと思われる人物は、City College of New York (CCNY) に在学時から知的交流を続けてきた。ベル、ハウ、クリストル、グレイザー、リップセットらがそれに該当する。

アーヴィング・クリストルは、1947～52年に『コメンタリー』の編集を務め、その後も、様々な雑誌の編集を手がけた知識人である。1965年には、ベルとともに『パブリック・インタレスト』を共同で創刊し、編集をおこなってきた。クリストルは、「新保守主義」のゴッドファーザーの異名をとり、「新保守主義」を形成・牽引してきた人物として、批判の対象とされることが多い。彼は、CCNY 在学時には、「青年社会主義同盟」に参加し、トロツキストとして知的・政治的活動をおこなっており、ここでベルやハウなど、後に「ニューヨーク知識人」とよばれる人々と出会い、活発な知的交流を続けていくこととなる。

ベルは、多くの友人がトロツキストとして活動する中、「社会民主主義者」として活動していた。クリストルらトロツキストとは立場を異にしていたが、ベルの知的態度から彼らの仲間としてともに議論の輪に加わっていた。「新保守主義者」となるクリストルとは、1970年代頃から政治的・思想的に明確に対立するようになっていく。

ハウは、CCNY 在学時には、トロツキストのリーダーとみなされており、「理論家」として高い評価を受けていた。その後は、「民主的社会主義」に向かい、ルイス・コーザとともに『ディセント』誌を立ち上げた。

グレイザーは、CCNYにおいて、シオニスト団体の機関紙を編集しており、その際、『ニューリーダー』誌との交流のなかで、ベルと知り合った。グレイザーは、ベルやリップセットの影響により、専攻を歴史学から社会学へと変えていった。彼は、『コメンタリー』の編集に携わり、リースマン、マートン、ラザースフェルド、ライト・ミルズらと仕事をした経験をもっている。1973年には、ベルが離れた『パブリック・インタレスト』の編集を務めた。

(3) 冷戦期におけるニューヨーク知識人の思想と行動、および知識人と政治・社会との関わり方について考察した。具体的には、マッカーシズムに対する理論的分析、態度について分析を進めた。ベルは、1955年に *The New American Right* を編集・出版し、その中にグレイザー、リップセット、ホフスタッターらを含むニューヨーク知識人のマッカーシズム論を収録している。彼らの論考は、共通の分析枠組み「地位政治」を用いて、マッカーシズムの社会的・政治的背景を探るという「理論提起の書物」という共通認識のもとに書かれている。こうした彼らの知的態度は、当時の喫緊の課題であるマッカーシズムを分析対象とするという「公共知識人」としてのあり方を示すものとなっている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

清水晋作、「ニューヨーク知識人のマッカーシズム論」、『比較文化研究』、査読無、27号、2017年、101-116頁。

清水晋作、「公共知識人としてのニューヨーク知識人 ベル、クリストル、グレイザー、ハウの追憶」(特集「知識と社会」)、『比較文化研究』、査読無、26号、2016年、5-22頁。

清水晋作、「最後の知識人 ダニエル・ベル ベルの知識人論とニューヨーク知識人」(特集「知識人の死 その社会学的意味を問う」)、『社会学研究』、査読無、96号、2015年、63-82頁。

清水晋作、「公共知識人としてのダニエル・ベル」(特集「知識人とコモンマン」)、『社会学史研究』、36号、2014年、19-38頁。

清水晋作、「書評、伊奈正人著『C・W・

ミルズとアメリカ公共社会 動機の語彙論と平和思想』、『ソシオロジ』59巻1号、査読無、2014年。

〔学会発表〕(計2件)

Shinsaku Shimizu, "Daniel Bell as Post-Cold War Intellectual: The Idea of 'Triunity' beyond Cognitive Framework of the Cold War," The 18<sup>th</sup> World Congress of International Sociological Association, Research Committee 08, "The History of Ideas of Transformation Processes," Yokohama, Japan, 16 July, 2014.

清水晋作、「最後の知識人 ダニエル・ベル ニューヨーク知識人研究の文脈に即して」、『東北社会学研究会大会シンポジウム「知識人の死」再考』、東北大学、2014年11月1日。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
盛岡大学ホームページ  
[http://www.morioka-u.ac.jp/kyoin/shimizu\\_shinsaku.php](http://www.morioka-u.ac.jp/kyoin/shimizu_shinsaku.php)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 晋作 (SHIMIZU, Shinsaku)  
盛岡大学・文学部・准教授  
研究者番号：60374873

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：

(4)研究協力者 ( )